

報 告

成人看護学実習における病院実習と学内実習の学びの比較

後藤 淳^{1†} 平 敦子¹ 神崎 匠世¹

抄 録

新型コロナウイルス感染症の拡大により、成人看護学実習において病院実習と学内実習の両方を経験した学生の実習における学びを比較することを目的とした。病院実習および学内実習の実習記録のうち学びのレポートを使用し、テキストマイニングツール KH Coder Ver.3 で分析を行った。病院実習では、患者を全人的に理解し患者に合わせた看護実践を行うことの重要性や葛藤が学びとして表れていた。学内実習ではグループワークで意見を共有しながら看護実践につなぐことができていた半面、患者の変化に応じた情報収集やアセスメントが不十分であったため、より詳細な事例の設定が必要であると考えられた。

Key words: 新型コロナウイルス, 学内実習, 学び, KH Coder

1 序文

日本看護系大学協議会によると、看護基礎教育における臨地実習の目的は、学生が学士課程で学修した教養科目、専門基礎科目の知識を基盤とし、専門科目としての看護の知識・技術・態度の統合を図りつつ、実践へ適用する能力を育成することである。そのためには、病院、施設、在宅、地域等の多様な場において、多様な人を対象として援助することを通して、学生が知識・技術・態度の統合を図ると共に、対象者との関係形成やチーム医療において必要な対人関係形成能力を養い、看護専門職としての批判的・創造的思考力と問題解決能力の醸成、高い倫理観と自己の在り方を省察する能力を身に付けることを目指している¹⁾。

しかしながら、2019年に出現した新型コロナウ

イルスが全世界で猛威を振るい、日々感染が拡大していった結果、A大学も例年通りの臨地実習が計画できなかった。そのため、各領域が学修内容を見直し、臨地実習に代わる実習を提供した。成人看護学領域においては、3週間を1クールとして2クール6週間の実習を行っている。2020年9月～11月は、1クール目として感染対策を順守しながら病院で通常臨地実習を行った。新型コロナウイルスの感染が拡大した12月～2021年2月は、2クール目としてS状結腸がんの事例を用いて周手術期患者の看護についての学内実習を行った。文部科学省では、臨地実習に代わる実習方法として、シミュレーターを用いた基本手技の実習やオンラインによる模擬実習等を提示している。そこで、新型コロナウイルス出現前から授業に取り入れている看護基礎教育養成校の報告²⁾⁻⁵⁾を参考に、2クール目の学内実習については、ディスカッションやグループワーク、モデル人形を用いたシミュレーション実習を実施し、周手術期患者における看護過程の展開と看護実

受稿：2023年5月24日 受理：2023年10月12日

¹ 広島都市学園大学健康科学部看護学科
広島県広島市南区宇品西5丁目13-18

践能力の強化を行った。

しかしながら、今回の学内実習は初の試みとなるため、臨地実習のような学修効果が得られるのかは不明である。そこで、実習終了後の学びのレポートを分析することで、病院実習と学内実習に共通する学び、および相違が明らかになるのではないかと考えた。2023年現在、新型コロナウイルスに対する感染対策は、流行時と比較して緩和されている。しかしながら、重症者が集まる病院においては、以前のように病院実習が実施できるとは限らない。病院実習が十分実施できない状態となった場合でも、学内実習で病院実習と同様の学びができていれば、臨地実習における教育の質が担保されたと考えられる。また、病院実習と学内実習で大きく異なる学びが明らかになった場合、今後の学内実習の学習内容における具体的な検討につなげることが期待できると考えた。

2 研究目的

本研究では、1クール目に経験した病院実習における学びと、2クール目に経験した学内実習の学びを比較することにより、共通点や相違点を明らかにし、学内実習における学修効果と課題についての基礎資料とすることを目的とした。

3 方法

3.1 対象

本研究の対象者はA大学の看護学科に所属する3年生のうち、2020年度の発達看護学実習（成人期の看護）を履修し、単位の認定が行われた76名である。

3.2 学内実習の内容

2クール目の学内実習では、50歳代、女性のS状結腸がん患者を事例として周手術期看護における看護過程の展開および看護実践を行った。看護実践時は、教員が模擬患者となったりモデル人形を用いて、臨床現場を想起する工夫を行った。また、グループワークやディスカッション、デブリーフィングを看護実践の前後に取り入れることで、他学生の看護実践における見学の際にも共に看護実践を行ってい

る自覚を持たせた上で、学びを共有することを意識して行った。学内実習のスケジュールと内容をTable 1に示した。

3.3 調査期間および調査方法

2021年4月～6月に実施した。調査方法は、発達看護学実習（成人期の看護）の実習記録のうち、1クール目の病院実習後に提出された学びのレポートおよび2クール目の学内実習後に提出された学びのレポートについて比較した。

3.4 調査内容

1クール目の病院実習では、学びのレポートとして「看護実践の評価と実習の学び（1クール目）」内の「実習での学び」を用いた。2クール目の学内実習では、学びのレポートとして「2クール目の学内実習の学び」を用いた。

3.5 分析方法

1クール目、2クール目の学びのレポートについては、テキストマイニングツールKH Coder Ver.3を使用した。KH Coderは、もともと社会学ないし社会調査の分野において、計量テキスト分析という方法を実現するために、樋口によって開発・公開されたソフトウェアである⁶⁾⁻⁸⁾。まずは、クール毎に学びをExcelに入力し、誤字や脱字、語句の統一化を行い、分析用データとして整えた。つぎに、KH Coderに読み込ませ、分析に不要であると判断した「今回」、「クール」、「1つ」、「目」、「自分」、「自身」の6語を削除したうえで前処理を行い、計量テキスト分析として「頻出語の抽出」および「共起ネットワーク」の2種類の分析を行った。頻出語の抽出では、クール毎に頻出された語を上位50位まで抽出した後、1クール目と2クール目で共通して頻出された語をまとめた（Table 2）。共起ネットワークでは、上位50位の頻出語について、共起関係にある語の強さをネットワーク図で表した（Fig.1・Fig.2）。図に示すSubgraphは、語と語の結びつきが強いグループを色分けにより分類している。Coefficientは、語と語の共起関係が強いほど線が大きくなっている。この共起性の強弱を測るために

Table 1 学内実習のスケジュールと内容

	曜日	内容
1週目	月曜日	・オリエンテーション ・大腸がん・手術に関するグループワーク
	火曜日	・事例の不足情報に関するグループワークと情報収集
	水曜日	・関連図と術後1日目の看護計画を発表
	木曜日	・術後の観察項目と合併症の予防方法に関する自己学習
	金曜日	・術前・術中・術後の看護に関する GW
2週目	月曜日	・術直後の観察と体位変換の実施 ・実施後のデブリーフィング
	火曜日	・術後1日目の観察項目と合併症の予防方法に関する自己学習とグループワーク
	水曜日	・術後1日目の観察と合併症予防の看護の実施 ・実施後のデブリーフィング
	木曜日	・術後1日目の初回立位（離床）に関する自己学習とグループワーク
	金曜日	・術後1日目の初回立位（離床）と急変時の看護の実施 ・実施後のデブリーフィング
3週目	月曜日	・退院時のパンフレット作成に必要な情報に関するグループワーク
	火曜日	・パンフレット作成
	水曜日	・パンフレットを用いた患者教育の実施 ・実施後のデブリーフィング
	木曜日	・2クール目の学内実習のふりかえり
	金曜日	・発表会により実習の学びを共有

Jaccard 係数を算出し 0.2 以上を描画した。また、Subgraph のグループ内における語と語の共起関係は実線で、グループ外における語と語の共起関係は破線で示している。Frequency は、語の頻出度を示しており、出現頻度が高いほど大きな円となる。また、分析結果については成人看護学領域以外で質的分析の経験がある研究者が確認することにより、結果の妥当性を高めていった。

4 倫理的配慮

対象者への研究参加の説明と同意については、発達看護学実習（成人期の看護）の成績判定が終了した後に、文書と口頭で行った。その際、同意は対象者の自由意思によるものであり、同意しない場合でも単位や成績には影響がないこと、同意後に研究参加の取りやめは可能なこと、データ収集や分析、結果の公表時には匿名性を順守することを説明した。対象者が同意書に署名することにより、研究参加に同意したと判断した。本研究は広島都市学園大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：2020017）。

5 結果

対象者 76 名のうち、研究参加への同意が得られた 48 名（63.2%）を分析の対象とした。

5.1 クール毎の頻出語の抽出

1クール目の病院実習と2クール目の学内実習において、学びのレポートから抽出された上位50位の頻出語リストを Table 2 に示した。共通して抽出された頻出語として、「患者」、「看護」、「学ぶ」、「考える」、「行う」、「ケア」等、30語であった。1クール目の病院実習にのみ抽出された頻出語として、「行動」、「コミュニケーション」、「疾患」、「見る」、「受け持つ」等が確認された。2クール目の学内実習にのみ抽出された頻出語として、「合併症」、「グループ」、「手術」、「意見」、「説明」等が確認された。

5.2 病棟実習における学びについての共起ネットワーク

1クール目の病院実習における学びについて共起ネットワークを Fig.1 に示した。Subgraph は7つ

Table 2 各クールにおける頻出語リスト

1クール目 (病院実習)			2クール目 (学内実習)		
順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	患者	294	1	患者	444
2	看護	116	2	看護	263
3	学ぶ	90	4	学ぶ	198
4	考える	85	8	考える	157
5	行う	78	3	行う	259
6	ケア	72	15	ケア	99
7	必要	53	6	必要	166
8	情報	51	22	情報	71
9	観察	50	14	観察	104
10	大切	46	20	大切	79
11	思う	41	10	思う	112
12	退院	41	13	退院	106
13	実習	39	9	実習	139
14	感じる	38	18	感じる	82
15	理解	38	24	理解	69
17	生活	32	28	生活	55
19	実施	31	35	実施	46
20	個別	28	39	個別	41
21	難しい	27	41	難しい	41
23	状態	25	19	状態	81
24	聞く	25	42	聞く	41
25	計画	22	38	計画	41
29	重要	21	25	重要	61
31	アセスメント	19	36	アセスメント	41
33	指導	19	12	指導	110
34	声	19	40	声	41
40	術後	17	5	術後	177
46	不安	16	21	不安	76
47	分かる	16	47	分かる	37
48	パンフレット	15	47	パンフレット	38
16	行動	32	11	合併症	160
18	コミュニケーション	31	16	グループ	110
22	疾患	25	17	手術	92
26	見る	22	23	意見	83
27	受け持つ	22	26	説明	70
28	変化	22	27	出来る	60
30	食事	21	29	知識	58
32	リスク	19	30	実際	52
35	伝える	19	31	起こる	51
36	入院	19	32	術前	51
37	歩行	19	33	ワーク	47
38	言う	18	34	人	47
39	立てる	18	37	予防	47
41	発言	17	43	学び	41
42	目標	17	44	対応	40
43	リハビリテーション	16	45	呼吸	38
44	状況	16	46	症状	38
45	多い	16	48	課題	35
49	回復	15	49	今後	35
50	合わせる	15	50	離床	35

太字は共通して抽出された頻出語

のグループに分類された。各グループの語について出現頻度の高い順に示すと、01グループでは「患者」, 「学ぶ」, 「行う」, 「大切」, 「コミュニケーション」の5語, 02グループでは「考える」, 「ケア」, 「実習」, 「個別」の4語, 03グループでは「看護」, 「情報」, 「観察」, 「理解」の4語, 04グループでは「生活」, 「状態」の2語, 05グループでは「計画」, 「立てる」の2語, 06グループでは「声」, 「目標」の2語, 07グループでは「必要」, 「思う」の2語であった。Jaccard係数は0.44～0.88と非常に強い共起関係であり, 特に01グループ内の「患者」と「学ぶ」および, 01グループの「患者」と03グループの「看護」においては0.8以上であった。また, 特徴として01グループの「患者」を中心として同じグループの「学ぶ」, 「大切」や02グループの「考える」, 03グループの「看護」および07グループの「思う」が共起関係にあった。

5.3 学内実習における学びについての共起ネットワーク

2クール目の学内実習における学びについて共起ネットワークをFig.2に示した。Subgraphは6つのグループに分類された。各グループの語について出現頻度の高い順に示すと、01グループでは「看護」, 「グループ」, 「ケア」, 「ワーク」の4語, 02グループでは「行う」, 「観察」, 「大切」の3語, 03グループでは「必要」, 「考える」, 「実習」の3語, 04グループでは「患者」, 「学ぶ」の2語, 05グループでは「術後」, 「合併症」の2語, 06グループでは「指導」, 「退院」の2語であった。Jaccard係数は0.74～0.94と1クール目の病院実習よりもさらに強い共起関係が認められた。特に02グループの「行う」と03グループの「実習」および, 02グループの「行う」と04グループの「看護」, そして06グループ内の「退院」と「指導」においてはJaccard係数0.9以上であった。また, 特徴として01グループの「看護」と02グループの「行う」および, 04グループの「看護」が中心となる語となっていた。01グループの「看護」では, 同じグループの「ケア」, 「グループ」や04グループの「患者」と共起関係にあった。02グループの「行う」では,

同じグループの「大切」, 「観察」や03グループの「実習」, 04グループの「看護」および, 05グループの「術後」と共起関係にあった。04グループの「患者」では, 同じグループの「学ぶ」, 01グループの「看護」, 02グループの「行う」, 06グループの「退院」と共起関係にあった。

6 考察

6.1 病院実習における学びの特徴

1クール目の病院実習では, 学生が能動的に様々な疾患や健康障害を抱えた患者と対面し, 情報収集・アセスメントを経て看護計画を立案, 実践して, 患者の反応から評価し, より良い看護を模索していきけるように, 実習指導者や教員がその都度, 助言や指導を行っていた。

共起ネットワークでは, 01グループの「患者」を中心としてコミュニケーションの大切さや患者から学ぶ姿勢, 患者をとおして考えることが重要と捉えていることから, 患者に関心を持ち, 患者がどのような状態, 状況であっても尊厳をもって関わろうとしている様子がうかがえた。奥山⁹⁾は, 看護基礎教育における臨地実習では患者との関りの中で倫理的葛藤やジレンマが生じており, それらを放置することなく場面を取り上げ教材化することで, 学生自身が気づきふりかえることができるようにしていくことの重要性を述べている。本研究においても, 患者との関りの中で, 学生が満足感や達成感を得られた場面からの学びだけではなく, うまくいかなかったことやつらい体験から得られたことも学びとして意味づけしていることがレポートより確認されている。また, 大重ら¹⁰⁾は, 倫理的葛藤やジレンマが生じた体験をしたときに, 実習指導者や教員よりもグループメンバーに相談することが多いことを述べている。グループメンバーからの助言やアドバイスにより, 学生自身でふりかえり学びを深化させられればよいが, うまく消化しきれずに負の感情として残る可能性もある。倫理的葛藤やジレンマが生じた場面を表在化し, 気づきやふりかえりができるようにするためには, 教員がその場面とともに存在して状況を把握する能力と, カンファレンスをとおしてディスカッションできる機会を意図的に提供す

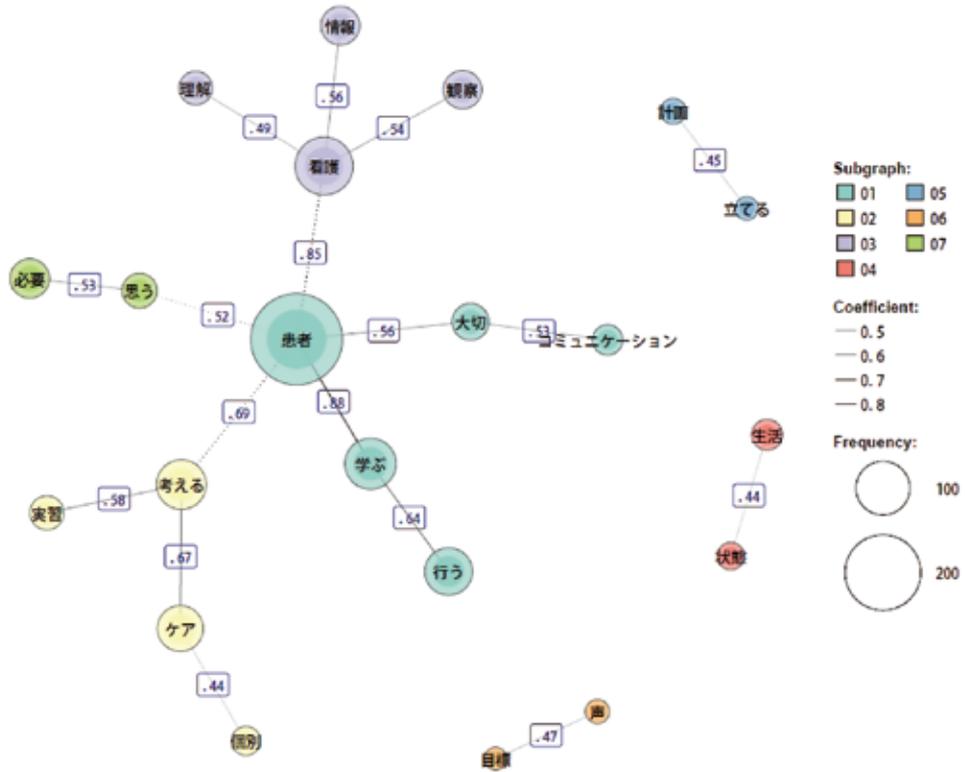


Fig.1 病院実習における共起ネットワーク

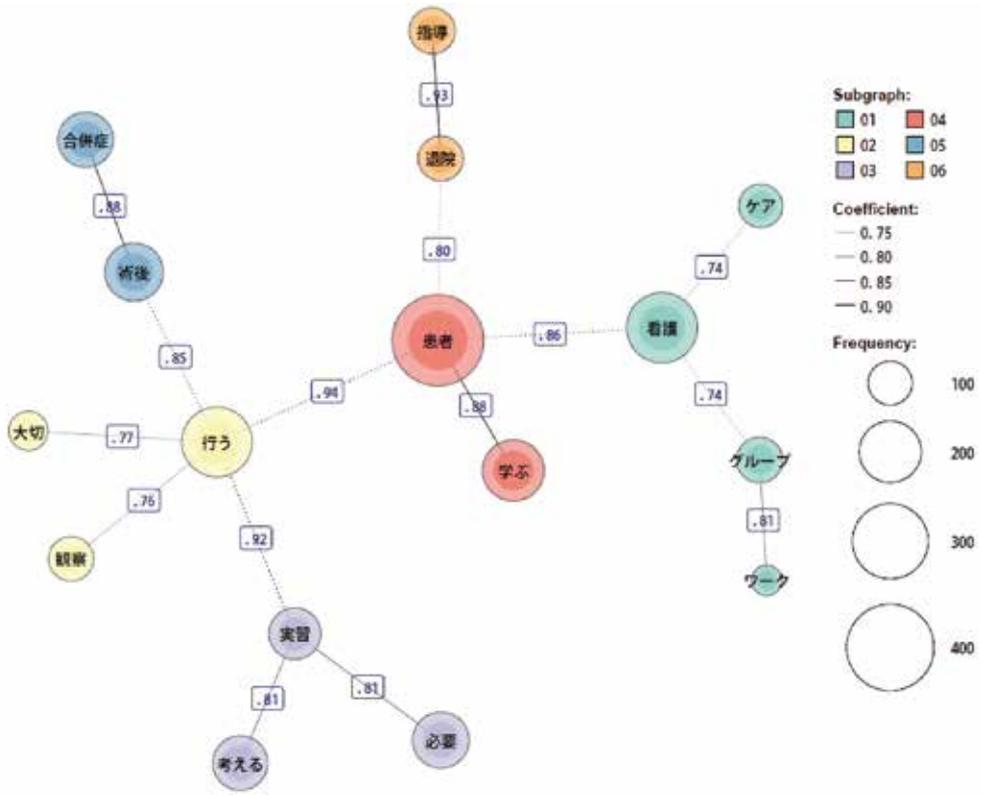


Fig.2 学内実習における共起ネットワーク

る関りが必要となってくる。

また、共起ネットワークの03グループにおいては患者を観察して情報を収集し、患者を理解することが看護につながることや、04グループにおいては入院中だけではなく普段の生活状況を知る必要があること、そして02グループにおいては個別性のあるケアを考えることが実習と捉えていることから、患者を全人的に理解し患者に合わせたケアを提供するために悩み考えている様子が見えがえた。学生の中には、患者の疾患や症状といった身体的な状態についてのみ理解できれば看護実践が可能であると考えられる者もいるが、看護が対象とするのは人であり、健康障害を抱えていることによる心理的社会的影響や、どのような生活を送ってきたのか、これからどのように生活していくのかまで看護に組み込めるように導く能力が教員に求められる。

6.2 学内実習における学びの特徴

2クール目の学内実習では、50歳代、女性のS状結腸がん患者を事例として、周手術期看護における看護過程の展開と看護実践を行った。看護実践については、特に術直後から術後1日目の急性期にある患者への関りと、退院間近にある患者への教育的関りを重点的に行った。また、看護実践の前後にグループワークやディスカッション、デブリーフィングを取り入れた。

共起ネットワークでは、01グループの「看護」、02グループの「行う」、04グループの「患者」が中心となっていた。学生たちは、グループワークで話し合った内容をもとに看護師役となってケアを実施し、その結果をもとにデブリーフィングを行うことで看護を学んでいた。また、特に術後合併症の早期発見や予防については、観察することの重要性を見出していた。さらに模擬患者ではあるが、退院指導を行うことでも学びが得られていた。佐野ら¹¹⁾や中本ら¹²⁾は、急性期の代替実習や臨地実習後のシミュレーション教育における学生の学びとして、グループでじっくり看護実践の根拠を学ぶことにより達成感が得られたことやグループ討議により自分にはない新しい発見が得られたことを明らかにしている。近年の病院実習では、低侵襲の術式により術後

の身体観察が重要となる急性期があつという間に経過し、すぐに回復期に移行することが多く、学生はなかなか術後合併症の予防に関する看護を実感しづらく学びにつながりにくい状況にある。また、退院後の生活を見据えた教育的関わりにおいても、患者に十分な指導が行えず理解度の確認ができないまま退院を迎えることもある。その点、学内実習では、特定の場面についてグループメンバーで何度も話し合いながら時間をかけて取り組むことにより、目的と根拠をもって看護実践を行うことの意味づけができたと考えられる。

6.3 病院実習と学内実習における共通の学びおよび相違点

病院実習、学内実習のどちらにおいても、学生は「患者」から学ぶことができていた。病院実習では、受け持ち患者に対して五感をフルに活用して得られたあらゆる情報をもとに看護を実践し、患者の反応をダイレクトに受け止めていくことで、看護の個性を少しずつ理解していた。学生一人一人の異なった経験が学びの深化につながっているが、ふりかえりの機会が得られない場合や、ふりかえりが量的にも質的にも十分でない場合には学びにつながらない可能性が考えられる。一方、学内実習においては、与えられた事例をもとにグループワークを経て必要と考えられる情報を効率的に収集していた。病院実習では十分な経験ができない場面においては、学内実習で何度もその場面を再現して体験を積み上げることで学びが深められると考えられる。しかしながら、今回の学内実習では、トピックス的に場面を設定したために、日々患者がどのように変化したのかを観察、アセスメントすることはできなかった。今後は、患者を入院時から受け持つように詳細な事例設定を行い、学生が日々の観察を実施して病院実習のように患者の反応を評価し個別的な看護実践につながられるような内容を追加していくことが必要であると考えられる。

7 本研究の限界

本研究においては、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るっていた特殊な環境下における実習で

あったことに加え、1大学の分析であることや、研究参加への同意が約6割であったことから、この結果を一般化するには限界がある。今後の課題として、病院実習中においても学内日を活用した効果的なシミュレーション教育を構築し、学生の学びを検討していくことである。

8 結論

本研究により、病院実習、学内実習のいずれにおいても患者から学ぶことができていたことが明らかになった。学内実習においては、場面の設定とグループワークを効果的に取り入れることにより、学生は急性期の看護に必要な学びができていた。今後は、患者の日々の変化から個別性のある看護実践につながられるような事例設定を追加する必要がある。

引用文献

- 1) 日本看護系大学協議会. 日本看護系大学協議会看護学教育向上委員会資料 看護学実習ガイドライン 2019, p1-10.
- 2) 深澤佳代子. 看護基礎教育を巡る課題とシミュレーション教育. 医療機器学 2011; 81(3): 197-200.
- 3) 石橋曜子. 臨床実践能力を養う看護教育システムを構築するためのシミュレーション教育. 福岡大学医学紀要 2016; 43(2): 83-88.
- 4) 炭谷正太郎, 久保田君枝, 檜原理恵, 小池武嗣, 黒野智子, 室加千佳 他. 聖隷クリストファー大学看護基礎教育における高機能患者シミュレーターを用いたシミュレーション教育の経緯と展望. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要 2017; (25): 29-39.
- 5) 永田明恵, 松田明子. 状況判断能力の育成を目的とした状況設定演習にハイブリッド・シミュレーション教育を取り入れた演習展開の実際と課題. 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要 2018; 14: 109-115.
- 6) 樋口耕一. 言語研究の分野における KH Coder 活用の可能性. 計量国語学 2017; 31(1): 36-45.
- 7) 樋口耕一. 社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して. 第2版. 京都市: 株式会社ナカニシヤ出版; 2021.
- 8) 李在鎬. 文章を科学する. 第1版. 東京都: 株式会社ひつじ書房; 2017. P82-101.
- 9) 奥山幸子. 看護基礎教育における領域別臨地実習に関する倫理教育の現状と課題 - 2010年~2020年に発表された文献検討 -. 大和大学研究紀要 保健医療学部編 2022; 8: 31-34.
- 10) 大重育美, 福島綾子. 看護学生の実習前後における道徳的感受性と倫理的葛藤の比較. 日本赤十字九州国際看護大学紀要 2021; (19): 7-15.
- 11) 佐野真樹子, 森安朋子, 利木佐起子. COVID-19 禍における急性期代替実習の学習効果と学生の思い. 佛教大学保健医療技術学部論集 2022; (16): 41-52.
- 12) 中本明世, 新井祐恵, 山居輝美, 野原留美. 領域別臨地実習後に導入したシミュレーション教育における看護学生の学びと演習評価. 甲南女子大学研究紀要Ⅱ 2022; (16): 27-34.

Comparison of Internships at Hospitals and On-Campus Training in Adult Nursing Training

Jun GOTO^{1†} Atsuko TAIRA¹ Naruyo KANZAKI¹

Abstract

The COVID-19 virus epidemic caused students of adult nursing to experience two types of nursing training: internships at hospitals and on-campus training. This research aimed to compare learning of students in these different training types. From the training records on hospital internships and on-campus training, reports on learning were selected and analyzed with a text mining tool, KH Coder Ver.3. In hospital internships, learning occurred as realizing the importance and overcoming inner conflicts in gaining holistic understanding of individual patients and practicing nursing suitable for each of them. In on-campus training, the students were able to share opinions in group work and reflect them on nursing practice but more detailed case settings seemed to be required because they lacked sufficient information gathering and assessment in response to changes in patient states.

Key words: COVID-19 virus, on-campus training, learning, KH Coder

¹ Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Hiroshima Cosmopolitan University
5-13-18 Ujinanishi Minamiku Hiroshima 734-0014 Japan